

---

# 籠の中から見た空は、

夏芽 玖守

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

籠の中から見た空は、

### 【Nコード】

N9512T

### 【作者名】

夏芽 玖守

### 【あらすじ】

「後ろの正面、だあれ？」

村で頻繁に起こる「神隠し」の真相を確かめようと、遠矢は友人の蓮見を連れて村はずれの神社に向かう。

そこで2人が見たものは、あまりにも残酷な真実だった

(前書き)

微々たるものですが、残酷な表現があります。苦手な方はご注意ください。

たすけて、たすけて。

どうか、わたしたちを、みつけて

\*

彼女は、一人待っていた。

なかなか訪れぬ夜明けを、淋しさに耐えながら。

けれど、彼女は自分が一人ではなくなったことを知った。

それは長い間待ち望んだ夜明けだった。

やっと幸せになれる。彼女の顔から笑みがこぼれた。

いつになったら、あなたに会えるのかしら？

ああ、待ち遠しい。

あなたに会えたなら、きっと私は幸せになれる。今はつらいことばかりだけれど、きっと幸せになれるの。

……そうね、泣いてばかりじゃいけない。強くならなきゃね。あなたを守るのは、私の役目だもの。

しかし、彼女の いや、彼女たちの幸せは、ただ利益だけを求める者たちによって一瞬で奪われ消え去った。

残されたのは亡骸と、彼女の深い哀しみの声。そして、たったひとつの願い。

どうして、どうして私たちだけがこんな目に？

私たちが何をしたというの？  
どこに行けば、私たちは幸せになれるの……？

不安そうに自分を見つめる目に、彼女はそつと語りかけた。

さあ、おいきなさい。

私の分まで、幸せになりなさい

\*

かごめ かごめ

かごのなかのとりは

いついつでやる

よあけのばんに

つるとかめがすべった

うしろのしょうめん だあれ

歌い終わるな、歌い終わるな。

少年は心の中で呟く。

うずくまった状態で背後に立つ人など、見えるわけがない。けれど言い当てられなかったら、自分はもうこの村にはいられない。皆の心を惑わした鬼として、神様のところに連れて行かれてしまうのだ。

無常にも歌が終わる。さあ、後ろの正面は誰だ。

「……わかり、ません……」

振り返ると、いくつもの光がこちらを見下ろしていた。薄い唇がやはりお前は鬼の子だと告げる。けれど恐怖に支配された少年には

彼の声は聞こえなかった。ただ、冷酷に、笑みさえ浮かべて言葉を発する男を見て震えていることしかできない。

「……………」

逃げ出そうとした少年を、控えていた若い男たちが阻む。

「連れて行け」

冷たい声が響いた。泣き叫ぶ少年を、男たちは顔色一つ変えずに運んでいく。

一度ためらいを捨ててしまえば、あとは何も感じなくなる。

自分たちが幸せに生きていくためには仕方ないのだと、自らに言い聞かせる必要もなくなるほどに。

しかし、彼らは気付かなかった。その一部始終を見ていたものがあったことに。

物陰に隠れていた少年、遠矢は、今すぐ男たちの眼前に出て行きたい衝動を抑えながら呟いた。

「見つけた」

《神隠しにあつて》次々と子供たちが消えていくのに、大人たちは揃って平然としていた理由。やはり大人たちは、みんなの行方を知っていたのだ。

「待つてるよ、みんな」

行き先はわかつている。神様のところに違いない。

必ず、助け出してみせる。誰にも知られずに死んでいくなんてこと、させてたまるか！

\*

どこにいるの？

早く探さなくちゃ。

淋しいと、ひとりで泣いている。

私を呼ぶ声が聞こえる。

待ってて。今すぐに会いに行くからね。

\*

遠矢は今年で十四歳になる。集落の中では、もう働き手として十分な年齢だった。この山奥の小さな集落で、家族や友達と共に貧しいけれど穏やかに、平和に暮らしていたはずだった。

けれど、最近何かがおかしい。集落の子供たちが度々いなくなる。

それなのに大人たちは神隠しだというだけで誰も探そうとはしない。……子供たちの両親さえも。

そして数ヶ月前から、遠矢の耳に「たすけて」という声が聞こえるようになった。今にも消えてしまいそうな儂い声が遠矢を呼ぶ。耳をふさいでも、まるで頭に直接語りかけてくるように声は消えなかった。

何かがおかしい。もしかしたら、あの声はいなくなった子供たちかもしれない。そう思って子供なりにいろいろと調べた。大人には知られないように、こっそりと。

そうしてわかったのは、ここ数年作物の生産量が落ち続けているということ。それはこの地で恨みを抱いて死んだ怨霊が堕ちた？鬼？が人間の子供に身をやつし、この地を呪っているためだと言われているということ。

そうして、昨日ついにその現場を押さえたのだ。

「だから、わかったんだって！ みんなの居場所が！」

小声で、しかし興奮した様子でまくし立てる遠矢に対し、蓮見は冷静だった。

「それで？ 助けに行つてどうするつもり？ 連れて帰ってきたってあいつらはもうこの村にいられないだろ？ 第一、生きてるかどうかだつてわからない。下手したら俺たちまで危ないかもしれない。」

悪いことは言わないから、やめとけよ」

親友である蓮見に反対されたのは少し悲しかったけれど、彼の言うことはもつともだと思つた。それに、彼の立場は十分に理解している。神社のご神木の下に捨てられていた彼を拾い、育ててくれた村の人たちに逆らうようなことなんてできない、と。

けれど、自分には知らないふりはできない。

そう遠矢が言うと蓮見は、彼をたしなめるように言った。

「遠矢の気持ちはわかるよ。でも、そんなことしたって何の解決にもならないだろ？俺たちはまだ子供なんだ。できることなんてないんだよ」

わかつてる。それでも、俺は。

「わかつた、一人で行く。助けを呼ぶ声が聞こえる、俺が行かなきゃいけないんだ」

「おい、待てよ！」

そう言つて、蓮見の静止の声も無視して、遠矢は駆けて行つた。

「……ああ、もう！」

蓮見も、仕方なく遠矢の後を追つた。

\*

遠矢が向かつたのは山奥にある、集落の守り神とされる神社だつた。普段は神聖な場所として立ち入りを許されていないためほとんど来たことはなかったが、遠矢は迷わなかった。まるで何かに引き寄せられているようだと思つた。助けを求める声は、相変わらず頭の中に響いている。それどころか、神社に近づくにつれどんどん大きくなっていった。自分が向かつている先に必ず何かがあるのだと、遠矢は確信していた。

息を切らせながら石段を登りそこにたどりついた遠矢は、ご神木の下にたたずむ人影を見た。白い着物を着た女性。

でも、何かが違う。あのひとは、人間じゃ、ない？それに、

もしかして

遠矢は恐怖で逃げ出したい気持ちを抑えながら女性に話しかけた。

「あなた、俺を呼んでた人？」

「あの子は……私の子供はどこ？」

探さなきゃ、会いに行かなきゃ。遠矢の姿など目に入っていないように、女性はそれだけを繰り返している。

「ちがう、どうして……」

女性はようやく遠矢を見つめて立ち止まり、手を伸ばして彼の頬に触れた。触れた場所から、遠矢の心には彼女の心の風景と、悲痛な慟哭が流れ込んできた。

さみしい、さみしい。

どうして私だけがこんな目に？

私たちが何をしたというの？

どこに行けば、私たちは幸せになれるの……？

それを見て、遠矢は彼女が誰であるかを知った。

彼女は、集落の地主の家に嫁いだ女性だった。

陰で行われていた、女性への酷い仕打ち。権力者の妻とはいえ正妻ではなく、身寄りもない彼女に人々は冷たかった。ある日彼女は子を身ごもった。しかし、出産を間近に控えたその日。

「……殺、された……？」

「子供が無事に生まれてきますように」そう祈るため、夜中にこっそりとここを訪れるのが彼女の日課だった。

そして、その日彼女は、潜んでいた家の人間に石段の上から突き落とされ事切れたのだった。

お腹の中の、子供と共に。

「ねえ……あの子はどい？」

たすけて。

あのこをみつけて。

はやく、あいたいのに。

あまりの衝撃に遠矢が動けずにいると、ふいに彼女が笑った。

「……見つけた……」

遠矢は弾かれたように、彼女の視線の先を振り返る。

そこにいたのは、蓮見だった。

「蓮見？　なんでここに……それに、『見つけた』ってどういう……」

そこまで言つて、遠矢はあるひとつの仮説に思い至った。蓮見の生い立ち。彼女が会えなかった理由。おそらく、それは間違つてはいないだろう。

現に女性は別人のように温かく微笑み、蓮見は目を見開いて女性を見つめたまま動かない。

「ああ、やつと会えた」

「おかあ、さん……？」

女性は、涙を流しながら蓮見を抱きしめた。

「そう、しっかりと生きているのね。それでいいわ。あなたは、生きて。幸せになつてね」

それだけを言つて、風にとけるように消えてしまった。

「お母さん！」

蓮見が母を呼ぶ。そのあまりにも悲しい声が、遠矢の耳に焼き付いて離れなかった。

「よかった、のかな。これで」  
しばらくして、遠矢はひとりごとのように呟いた。

立ち尽くしていた蓮見が、ようやく遠矢のほうを向いて口を開く。  
自分はなぜか生きているけれど、母親は集落の人間に殺されていた。そんな事実を知って、蓮見はどう思っただろう。絶望してないだろうか。

集落の人間が、憎くはないだろうか。

「うん、よかつたんだと、思う。母さんにとっても……俺にとつても」

蓮見は笑った。その表情に、遠矢は心が軽くなるのを感じた。

「そりゃ辛いけど、これからどうしたらいいかわからないけど。でも今はいいんだ。俺はひとりじゃないって、わかつたから」

孤児だった自分に集落の人は優しくかった。

それでも、やはり孤独を感じることもあった。

自分はひとりぼっちなのだと、何度も何度も思い知らされた。けれど。

「俺のこと、ずっと想ってくれてる人がいた。それだけで十分だよ」  
そうだな、と遠矢は笑った。蓮見を元気付けられるように。

「それに、俺もいるだろ？」

「あー、うん。そういうことにしといてやるよ」

「素直じゃねえな。でも、ここに来てよかつたのか？ 危険なことはできないんじゃないのかよ」

「仕方ないだろ、放っておけなかつたんだから」

蓮見は少し照れたように言った。いつでもどんなことがあっても、俺のことを思って、助けてくれる。出自がどんなものでも蓮見は変わらず自分の大切な親友だと、遠矢は改めて思った。

「……それに母さんにも会えだし、いいよ。だから、早くみんなを探そう。できるだけ、ばれないように」

その言葉を聞いて、遠矢はここに来た当初の目的を思い出した。さつきまでの出来事のおかげで、すっかり忘れていたのだ。

「そうだ、みんなを探さなきゃ！」

二人が駆け出そうとした、その時。

「そこまでだ」

いつか聞いた、冷たい声が聞こえた。

「秘密を知ったものを生かしておくわけにはいかない。悪いが消えてもらおうか」

そこにいたのは、数人の集落の大人たち。真ん中に立って言葉を発しているのは、この神社の神主だった。

いつも優しく、穏やかな微笑みをたたえていたはずの初老の男性は、まるで何かにとり憑かれたかのような冷たい目で二人を見下ろしていた。

「どうしてここに……」

蓮見は震える声で尋ねた。遠矢がちらりと目をやると、彼の顔色は真っ青だった。

「お前らがこそこそ嗅ぎまわっていたことなんて、すべてお見通しだったのさ。まったく、勝手なことをしてくれる」

神主は感情のこもらない声で告げた。

「さあ、茶番は終わりだ。仲間とやらの元へ、行ってもらおうか」その言葉を聞いて二人は同時に叫んだ。

「どうということだよ！」

「……まさか、」

それを見て、神主は機械的に言う。

「『鬼の子は神にその血肉を捧げ、災いを被わなければならない』それがこの掟」

至極当然、といった風に、彼は笑みさえ浮かべていた。

「さあ、お前たちもすぐに神に捧げてやろう」

後ろに控えていた男たちに合図を送ると、彼らは二人を捕まえて動きを封じた。

神主が手に刀のようなものを持ってこちらにやってくる。

「まずはお前からだ、蓮見。まさかあの女の子だったとは。お前が鬼の子だったのだな」

「待て、蓮見は関係ないだろ！俺が勝手に……」

「鬼の子であるこやつを、殺さない理由はないだろう。お前は後だ、遠矢。自分の勝手な行動のせいで友達が死んでいく様を、よく見ているがいい」

そう言つて、神主は蓮見の心臓めがけて刀を振り下ろした。

「蓮見！」

刺された蓮見の衣服がみるみるうちに赤黒く染まっていく。

遠矢は無我夢中で自分を掴んでいた男の手を振り払い、倒れている蓮見の元へ走り寄った。どこにそんな力があつたのだろう。周りの大人たちを蹴散らし、遠矢は蓮見を抱きかかえた。

「蓮見、はすみっ……」

錯乱状態に陥った遠矢は、ひたすらに蓮見の名前だけを繰り返した。

「にげる、遠矢……！」

蓮見が搾り出すように叫んだ、その瞬間。

「う……っあ……」

遠矢の背中に衝撃が走った。

ウシロノシヨウメン、ダアレ？

見ると、胸の辺りから刀の先が突き出ている。刀が引き抜かれ、遠矢はその場にくずおれた。

倒れている親友。

笑う大人たちの顔。

赤黒く血に染まった自分。

後ろの正面は。

「うわああああああっ！」

そこで遠矢の意識は途切れ……

後には、赤く染まった人々の亡骸だけが残されていた。

\*

許さない。

仲間の命を奪って平然としている奴らを。

彼女たちを貶め幸せを奪った奴らを。

俺を、殺した奴らを。

あれ？

どこからか、歌が聞こえる。

かごめ かごめ

かごのなかのとりは

いついつでやる

よあけのばんに

つるとかめがすべった

うしろのしょうめん だあれ

そこには、かつて探し求めた友達の姿。

「遠矢、何やってるの？」

「一緒に遊ぼうよ」

でも、俺はみんなの仇をとらなきゃ。

「もう、いいんだよ。ここで、俺たちだけで生きていこう？」

俺の頭に手を置いて、そう言ったのは蓮見だった。よかった、生きていたんだ。やっぱりあれは夢だったんだな。

蓮見の手はともあたたかくて、その手が触れた瞬間、俺は心の中で憎しみが霧散する音を聞いたような気がした。

そうだ、誰にも傷つけられることなく、ここで生きていこう。

みんな一緒に。

俺たちの？世界？で。

俺は、足早にみんなの元へ駆けていった。

\*

「その村ではかつて、西洋の魔女狩りのようなことが頻繁に行われていたそうです。子供を囲み、その周りを大人たちが回る。歌が止まった時に後ろにいる人を言い当てられたらそれは神に選ばれた子である。しかし外れてしまったら、それは鬼の子である、と。そうして、何人もの子供たちが殺されました。本当は口減らしのためだったとか、伝染病が流行ったせいだとか、いろいろと言われているが本当のところはよくわかりません」

「彼らは……本当に存在したんですか？」

目の前の穏やかなお爺さんの口から紡がれるあまりにも凄惨な話に、俺はたまらず口を挟んだ。

「さあ、言い伝えられていることですから、それはわかりませんが、けれど何人もの人が見たというんです。もう住む人間がいなくなり、廃れたはずの集落の、さらに山奥の神社で子供たちを」

やはり、彼らは今もそこにいるんでしょうね。小さな籠の中に、捉われたままなのでしょう。

そう言われ、俺は何かを言おうとして言葉を探した。でも、言葉が口からでてこない。そんな俺を見て、お爺さんは俺の言いたいことを察したようだった。

その子達は、笑っていましたか？

「ご神木の下で、楽しそうに遊んでいたそうですね。それが、せめてもの救いでしょうね……」

今日聞いた話をまとめようと学校に戻ったが、俺はいまだ夢心地のままだった。

大学の研究課題で、俺はこの地方に伝わる民話を調べていた。それで、そういったことに詳しいという人に話を聞きに行ってきたのだ。

民話に若い人が好きなような話はあまりないから申し訳ないのですが、お爺さんは多くの話をしてくれた。そして、最後に語られたのがこの話だった。登場人物皆殺しのラストなんて、なんて後味の悪い話だろう。まったく、あのお爺さんも相当人が悪いな。

それにしても、彼らは幸せになれたのだろうか。

今もまだ、永遠の中に捉われて、かごめうたで遊んでいるのだろうか。

案外、それでもいいかもしれない。

誰にも邪魔されずに、笑っていてくれたらいい。

会ったこともない子供たちだけど、そんなことを思った。大人の犠牲になるしかできなかった彼らに、せめて死後だけでも幸せでいてほしいと。

「初見くん」

ぼんやりしながら廊下を歩いていたら、声をかけられてびっくりして我に返る。振り返った先には、俺に論文を課した民間伝承研究の講義の教授がいた。

「どうしたんですか、教授？」

「今日、お話を伺いに行くと言っていたので、どうだったかと思いまして」

「面白い話が聞けました。これなら論文も書けそうです」

「そうですか。それはよかったです」

教授は微笑んで、そのまま俺とは反対の方向に歩いていく。

俺も歩き出そうとしたその時、ふいに、教授の足音が止まった。なぜだか不安に駆られて、もう一度教授のほうを振り返る。

教授もこちらを見ていて、そして気味の悪い笑みを浮かべて言った。

「初見くん」

「……なんですか、教授？」

「どうか、背後にお気をつけて」

教授のものとは思えないような気味の悪い声が響く。

「え……？」

驚きで何も言えないでいると、いつの間にか教授は元の穏やかな表情に戻っていた。

「いえ、なんでもありません。どんな化け物より何より、人間が一番恐ろしいものですな」

(後書き)

普段書かないような、ちょっとシリアスかつホラーちっくな作品です。

しかし私の各作品はどれもカテゴライズしにくいことこの上ない……

読んでくださってありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9512t/>

---

籠の中から見た空は、

2011年10月9日06時36分発行